

山崎

—長野県上田市山崎遺跡・山崎城跡緊急発掘調査報告書—

1979年3月

上田市教育委員会
上田市川西地区土地改良区

序

上田市の浦里地区に第2次構造改善事業が実施されることになりました。この地区には古代に東山道が通っており、浦野駅も置かれるなど歴史的に重要な地域でもありました。また、繩文時代から中世にかけての貴重な遺跡も数多く残されています。

このたび、構造改善事業の対象地に浦野の上前沖遺跡、それに岡の原遺跡・山崎遺跡・山崎城跡の4遺跡がかかることになりました。

上田市教育委員会ではこれらの遺跡の保護について、構造改善事業主体者川西地区土地改良区、及び県教育委員会と協議いたしました。その結果、発掘調査を行って記録保存をすることで合意しました。

発掘調査は、上田、小県地方の考古学研究者で組織した上前沖、原遺跡発掘調査団にお願いいたしました。昭和54年10月から55年2月にかけての4ヶ月間にわたって発掘調査が実施されました。この時期は最も寒い時期でもありました。

この結果、上前沖遺跡、原遺跡からは遺構は発見されませんでしたが、山崎遺跡からは奈良時代から平安時代にかけての住居跡が3軒発見され、山崎城跡は中世の豪族の城跡とわかりました。これらの成果は、浦里地方の古代史・中世史を研究するうえでの貴重な資料となることでしょう。

戴寒の折、発掘調査に参加された調査員の先生方、地元の皆さんに厚くお礼申しあげると同時に、調査に終始ご協力いただいた川西地区土地改良区の関係者の方々に感謝申しあげます。

1979年3月

上田市教育委員会
教育長 滝沢 石

例　　言

- 1 本書は、昭和54年度に実施した長野県上田市大字浦里・岡に所在する、上前沖遺跡・原遺跡・山崎遺跡・山崎城跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、川西地区土地改良区から委託を受けた上田市教育委員会が委嘱した、上前沖・原遺跡発掘調査団が行った。
- 3 総筆は次のとおり担当し、編集は事務局で行った。

第1章第1節・2節	事務局
第1章第3節・第2章	宮原洋子
第3章・第4章	宮原洋子、五十嵐幹雄
- 4 遺物の整理は、川上 元・宮原洋子が担当した。
- 5 遺物の実測、トレースは小林真寿君の手をわざらわした。
- 6 本調査は、川西地区土地改良区はじめ、地元自治会の方々の全面的協力があって完了した。
- 7 遺構実測図・写真などの記録および遺物はすべて信濃国分寺資料館に保管されている。

目 次

序 文

例 言

第1章	発掘調査の経過	4
第1節	発掘調査に至る経過	4
第2節	調査団の構成	4
第3節	発掘調査日誌	5
第2章	環 境	7
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	7
第3章	遺構と遺物	9
第1節	上前沖遺跡・原遺跡	9
第2節	山崎遺跡	9
第3節	山崎城跡	17
第4章	まとめ	25

挿図目次

第1図	遺跡分布地図	8
第2図	第1号住居址実測図	10
第3図	第2号・第3号住居址実測図	11
第4図	第1号住居址出土遺物実測図	13
第5図	第2号住居址出土遺物実測図	14
第6図	第2号・3号住居址出土遺物実測図	15
第7図	遺構外出土遺物実測図	16
第8図	山崎城跡実測図	19
第9図	山崎城跡出土遺物実測図	24

図版目次

図版1	遺跡 山崎城跡遠景・西堀・東堀
図版2	遺構 遺構全景・集石遺構
図版3	遺構 集石遺構
図版4	遺構 集石遺構・東堀

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

第2次構造改善事業の昭和54年度事業予定地内に、上田市大字浦野の上前沖遺跡、大字岡の原遺跡が存在していることが判明したため、上田市教育委員会では昭和53年度に対象地域内の分布調査を行った。

上前沖遺跡はその多くが水田で、地表からは遺物の散布はみられないものの耕作中に土器が出土していた。また、原遺跡は現在畑地で、地表に土器の散布が認められた。このことから、工事に先立ち発掘調査の必要性が指摘された。

この分布調査の結果に基づき、事業主体の川西地区土地改良区、県教育委員会文化課、市教育委員会の三者でこの2遺跡の保護について協議をした結果、上前沖遺跡、原遺跡ともに工事に先立ち発掘調査を行い、記録保存をすることになった。

上田市教育委員会では、昭和54年9月6日上川・小県地方の考古学研究者に上前沖・原遺跡発掘調査団を委嘱し、この調査団に発掘調査を委嘱して遺跡の記録保存にあたった。上前沖遺跡の発掘調査に先立ち、試掘調査を行っていたところ、地元の人から構造改善事業対象地の山崎地縁に「尾曾野屋敷」と呼ばれている所があり、堀跡が残っているとの話を聞き、発掘調査団で現地調査したところ、岡台地の先端部に2本の堀跡がきれいに残っており、明らかに城跡と思われる遺構が存在していたため、その地名をとって「山崎城跡」と名付けることとした。また、この城跡の西側約200mの地点、岡集落の東側のはずれの宅地造成地から多量の土器が出土しており、この遺跡（山崎遺跡と名付ける）が構造改善工事予定地まで広がっている了懃惟も考えられた。

このため、上田市教育委員会では急速この保存対策を川西地区土地改良区、県教育委員会文化課と話し合ったが、既に工事を業者発注しており設計変更はできないとのことから両遺跡とも記録保存することを決定し、上前沖・原遺跡発掘調査団にこの2遺跡の発掘調査もあわせて委嘱した。

第2節 調査団の構成

調査員（団長）	五十嵐幹雄	（上小考古学研究会）
※（調査主任）	川上 元	（上田市立博物館）
※	西沢吉次郎	（上小考古学研究会）
※	小原 等	（菅平小学校）
※	塩入 秀敏	（上田女子短期大学）
※	児玉 韶文	（上田染谷丘高等学校）
※	百瀬 新治	（依田窯南部中学校）

調査員（調査主任） 島羽英継（上田養護学校）
 " 宮原洋子（上小考古学研究会）
 調査補助員 坂井美嗣（長野大学生）
 " 小林真寿（長野大学生）
 事務局
 局長 山浦勇（社会教育課長）
 次長 小山幸（文化係長）
 主事 林和男（文化係主事）

第3節 調査日誌

昭和54年9月6日 上前沖・原遺跡発掘調査団会議（於）上田市役所。

上前沖遺跡、原遺跡試掘調査日誌。

山崎遺跡・山崎城跡発掘調査日誌

- 12月22日（土） 発掘調査団会議（於）川西公民館。
- 12月23日（日） 山崎遺跡…試掘グリッドNo.1～11設定、掘り下げる。
- 12月24日（月） 曇り 山崎遺跡…試掘グリッドNo.12～19設定、No.15・17・19掘り下げる。出土遺物、ほとんどなし。山崎城跡…城跡全景、及び東・西堀写真撮影。試掘グリッドNo.20～29設定、掘り下げる。
- 12月25日（火） 晴れ 山崎城跡…試掘グリッドNo.23～29掘り下げる。グリッドNo.30～34設定、掘り下げる。グリッドNo.30の東南隅より石組み遺構出現、拡張する。遺構内より内耳土器出土、写真撮影後、取り上げる。No.32より弥生式土器片、No.33より青磁片出土。東堀、トレーン設定、掘り下げる。
- 昭和55年1月8日（火） 発掘調査団会議（於）上田市役所本調査区域、及び日程の立案・検討。山崎遺跡は、試掘グリッドNo.4を中心として、その周辺を、山崎城跡は、城跡全体を調査対象とする。
- 1月12日（土） 晴れ 山崎城跡…重機による表土除去作業後、グリッド設定、発掘作業開始。
- 1月13日（日） 雪 山崎城跡…グリッド掘り下げる。雪のため途中で中止。○1月14日（月）～1月15日（火） 雪のため作業中止。○1月16日（水） 曇り 山崎城跡…西堀の草木除去作業、
- 1月17日（木） 中止。○1月18日（金） 晴れ 山崎城跡…東部・東北部グリッド掘り下げる。
- 1月19日（土） 晴れ 山崎城跡…東部・東北部・西北部グリッド掘り下げる。東北部に長方形石組み遺構、西北部に溝状遺構あり。土器片多数出土。
- 1月20日（日） 晴れ 山崎城跡…前日の作業続行。東部に炉址、西北部に石組み遺構あり。遺構内より内耳土器片他出土。
- 1月21日（月） 雪～1月22日（火） 晴れ 降雪及び積雪のため作業中止。○1月23日（水） 晴

- れ 山崎城跡…廃土の除去作業、山崎遺跡…ブルトーザーによる表土除去作業後、グリッド設定。D-12・14、E-13~15、F-5・7・9・11・13グリッド掘り下げる。弥生住居址・炉址あり。縄文式・弥生式土器片出土。
- 1月24日（木）晴れ 雪のため作業中止、○ 1月25日（金）晴れ 山崎遺跡…C-12・14~16、D-7・8・13・15・16、E-7・8・16、F-6・8・14~16グリッド掘り下げる。
 - 1月26日（土）晴れ 山崎遺跡…C-7・8、D-9、E-9、F-5外・G-6~8グリッド掘り下げる。SB-01、SB-02を確認。区域外に住居址及び土塁が認められ、横堀破片出土。
 - 1月27日（日）晴れ 山崎遺構…SB-02を4分割する。SB-02内に石組み遺構があり、また、土器片多数出土。○ 1月28日（月）晴れ 山崎遺跡…SB-024分割、掘り下げ続行。SB-01、4分割、掘り下げる。
 - 1月29日（火）曇り 山崎城跡…東・西堀、トレンチ掘り。○ 1月30日（水）雨 雨天中止。
 - 1月31日（木）晴れ 山崎遺跡…SB-01の実測。SB-02掘り下げ、及び棺状石組み遺構の実測。SB-02内にカマド跡あり。土器片多数出土。遺構の写真撮影。山崎城跡…東・西堀、トレンチ掘り続行。
 - 2月1日（金）晴れ 時々曇り 山崎遺跡…SB-01・SB-02実測。遺構面上遺物取り上げる。SB-02床面掘り下げに伴い土器片多数出土。SB-01内石組み遺構・SB-02内棺状石組み遺構共、内に焼土あり。遺構の写真撮影。山崎遺跡の現場発掘調査は、本日をもって終了とする。山崎城跡…東・西堀、トレンチ掘り続行。
 - 2月2日（土）晴れ 山崎城跡…東・西堀トレンチ、及び北西部グリッド掘り下げる。○ 2月3日（日）晴れ 山崎城跡…西堀トレンチ完了。北西部の溝状遺構a・b・c・d設定、掘り下げる。L-21~M-21グリッド内に石組み遺構あり。
 - 2月4日（月）晴れ 山崎城跡…溝状遺構a・b内より土器片多数出土。M-15、L-13~14グリッド内に石組み遺構あり。I-19グリッドより土器片多数出土。西堀トレンチ断面実測。
 - 2月5日（火）晴れ 山崎城跡…グリッド掘り下げる。N-14、O-14、P-14各グリッド内に石組み遺構あり。M-6グリッド内石組み遺構半掘。
 - 2月6日（水）雪のち晴れ 雪のため作業中止。○ 2月7日（木）晴れ 山崎城跡…溝状遺構a・c拡張、b~c間掘り下げる。北側に狭地壠跡あり。東堀際拡張、掘り下げる。○ 2月8日（金）晴れ 山崎城跡…遺構の掘り下げ、及び実測。
 - 2月9日（土）晴れ 時々曇り 山崎城跡…東堀・西堀実測。石組み遺構を掘り下げる。○ 2月10日（日）晴れ 山崎城跡…遺構の掘り下げ、及び実測。地元対象の現場見学・説明会を催す。見学者多数。○ 2月11日（月）晴れ 山崎城跡…城跡全体・溝状遺構及びその他の遺構の実測。溝状遺構掘り下げる。遺構の写真撮影。遺構面上、及び遺構内の遺物を取り上げる。
 - 2月12日（火）晴れ 時々曇り 山崎城跡…遺構の実測、写真撮影。遺物の取り上げ。本日にて、山崎城跡の現場発掘調査を終了とする。○ 2月中旬遺物整理（於）博物館。

第2章 環境

第1節 地理的環境

上田盆地は上田を中心とする千曲川以北の川東平野、千曲川西側の川西平野、烏帽子山麓地帯、依田川下流の平野とにわけられる。このうち、川西平野は浦野川と産川によって作る盆地性平野で、川西丘陵によって塙田平と浦野平野に分けられる。浦野平野は浦野川本流の作った扇状地面で谷平野といえる。

青木村で沢川、湯川、沓掛川をひとつにした浦野川は、上田市仁古田地籍で阿鳥川を、さらに和合地籍で室賀川と合流し、下流域でさらに塙田平から流れる産川といっしょになり千曲川へと流れ込んでいる。なお、子燈嶺岳に源をもつ阿鳥川は、きわめて急流のため浦野面の扇状地を広く形づけており、室賀川もその下流域にやはり広い扇状地をつくっている。

上前沖遺跡は、阿鳥川によってつくられた扇状地上の、阿鳥川の左岸、上町集落と阿鳥川にはさまれた地帯一帯に存在し、原遺跡は、飯繩山の山裾の室賀川の扇状地面と接するあたりに存在している遺跡である。山崎遺跡は、浦野川と室賀川の合流地点約1km浦野川上流の、現在の岡集落西側一帯に所在しており、山崎城跡は、浦野川と室賀川の合流地点の、この両川によって形成された舌状の台地上に位置している。

第2節 歴史的環境

浦野川流域に展開する浦野広谷は、奈良・平安時代に東山道が通り、その時代の遺跡が多いが、この地には縄文時代前期からの遺跡が残されている。浦野川上流域には縄文時代の遺跡、下流域には弥生時代から古墳時代の遺跡がみられ、浦野川全流域とおしては奈良時代以降の遺跡が極めて多く存在する。

縄文時代の浦野広谷は、上室賀の谷鬼遺跡と小泉の和合遺跡で前期の遺物が発見されるにすぎないが、中期になると青木村中挟遺跡をはじめとする諸遺跡が山麓地帯に数多く分布するようになる。縄文後晩期になると遺跡数も減り、浦野の下前沖遺跡、小泉の横道下遺跡などがわずかに残されているだけである。

弥生時代・古墳時代にはいると、浦野川の底湿地を望むところに集落が営まれるようになるが、浦野川上・中流域では土器の散布地はみられるものの、集落を形成すると考えられる規模のものではなく、下流域に至って上田原遺跡群、中之条遺跡群のような大遺跡群が展開する。古墳の分布も上流域には、青木村村松の塚穴古墳、浦野の浦野塚古墳とわずか2基が知られているにすぎないが、室賀川合流地点からの下流域には上田盆地でも有数の古墳群が形成されている。

古代令制による官道のひとつ、東山道が開通すると、この官道は浦野川に沿って開かれることになる。松本盆地に入った東山道は、東筑摩郡絲織駅から保福寺峠を越えて青木村奈良本に出、



- | | | |
|----------|-----------|----------|
| 1. 中馬越遺跡 | 6. 前沖内堀遺跡 | 11. 原遺跡 |
| 2. 西之宮遺跡 | 7. 下前沖遺跡 | 12. 山崎遺跡 |
| 3. 東之宮遺跡 | 8. 岡城跡 | 13. 久保遺跡 |
| 4. 上前沖遺跡 | 9. 古城遺跡 | 14. 山崎城跡 |
| 5. 藤の木遺跡 | 10. 滝遺跡 | |

第1図 遺跡分布地図

浦野川を下り上田市中之条付近で千曲川を渡り、さらに千曲川をさかのぼって碓氷坂を経て上野国に至っているが、この浦野川流域には浦野駅がおかれていた。浦野駅は、現在の大法寺の南、当郷地籍に推定され、東山道は浦野川左岸の山裾づたいに通っていたと考えられている。事実、この一帯には8世紀からの集落跡が多い。

また、小原郡のひとつ、跡部郷が室賀・浦野から青木村にかけて考えられ、青木村一帯には塙原の牧もおかれていた。

その後、この浦野広谷は浦野庄と小泉庄の2つの庄園が置れる。浦野庄は、青木村当郷を中心として東は上田市浦野・越戸、西は青木村全域の範囲が考えられる。また、小泉庄は、上田市日向小泉を中心として、東は上田原・築地・神畑、南は保野・舞田、西は仁古田・岡、北は室賀までがその範囲とされている。この庄園の經營者が後の浦野氏、小泉氏であり、庄園を母体に強力な武士團に成長してゆく。

第3章 遺構と遺物

第1節 上前沖遺跡・原遺跡

上前沖遺跡

上前沖遺跡は水田となっており、遺物の表面採集を行ったが、地表からはほとんど遺物を得ることができなかった。このため、遺跡の所在地を確認するために、上前沖地区の構造改善予定地全域に試掘調査を行い、その範囲をつかむことにした。

田1枚に1~2ヶ所の試掘坑を設定して、調査を行ったがそのいずれからも遺構を検出することができなかった。遺物も1試掘坑の表土層から1・2点の中世及び近世陶器が出土したにすぎなかった。

このため、上前沖地区の構造改善事業予定地内には遺跡は存在しないものと判断して、本調査は行わないことにした。

原遺跡

原遺跡は、山麓地帯の傾地に存在する。ここからは、地表にかなりの土師器、中世陶器の散布がみられた。このため、最も遺物の散布の多い地帯に試掘坑を入れてみることにした。

この原遺跡は尾根状の台地と、その谷とに広がっているためまず台地上にトレンチを設定して調査を行った。台地に沿って南北へ2m×80m、それに台地を横断するように2m×30mのトレンチを設定して調査を行った。ところが、このトレンチでは、地表下約20cmで地山になってしまい、そこからは全く遺構と考えられるものが検出されなかった。表土から若干の近世・中世陶器が出土しただけであった。

このため、調査箇所を谷部に移すこととした。ここでは、谷の斜面に沿って東西に2m×50mのトレンチを設定した。ところがここでも、黒色土の耕作土の下はすぐに地山となっており、ここでも遺構を検出することができなかった。

これらの調査の結果、原遺跡の構造改善予定地は、単に遺物の散布地だけであって、この遺跡の中心部は他にあると判断して調査を中止した。

第2節 山崎遺跡

山崎遺跡は、浦野川の左岸、岡集落の西側一帯に広がっている遺跡である。その大部分は宅地で西側が水田となっているため、正確な範囲は不明であった。このため、構造改善予定地内に含まれる遺跡の西側の限界をさぐるため、浦野川の岸崖面にそって試掘坑を設定した。この結果、集落に接する1枚の水田から多量の土師・須恵が出土したものの、それ以西に設定した試掘坑からは全く遺構及び遺物が検出されなかった。このことから、この山崎遺跡の西側の範囲は、この1枚の水田までと判断し、ここを調査対象とすることと決定した。

調査は表土をブルトーザーで除去し、遺構の検出につとめたところ、2ヶ所に黒色土の入った落ち込みが発見された。この箇所を中心に精査を行ったところ、3軒の住居址を検出することができた。西側の住居址を第1号、東側上層の住居址を第2号、下層の住居址を第3号とした。

第1号住居址（第2図）

北壁にカマド、東壁に小炉址をもつ隅丸方形の住居址である。規模は東西約300cm・南北350cmを計るが、南壁が250cmあるのに比し、北壁は320cmを計りいくぶん台形を呈する住居址である。主軸方向はN-27°-W。

原地形が緩斜面で、そこを水田としてあるため、住居址の壁が破壊されており、わずか2~3cmの高さで検出できたにすぎない。

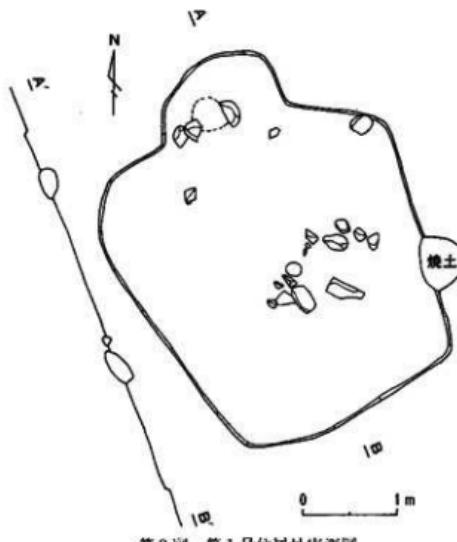
住居東半部には人頭大の石が10余個ブロック状に残されている。

北壁のほぼ中央に作られたカマドは、耕作等によって破壊されているものの、炊口30cmほどの石組のカマドである。わずかに袖石が残り、炉床は鮮かな焼土となっており、いくぶん掘りくぼめられている。

東壁中央南寄りに検出された小炉址は、径60cm×50cmの半月形で、壁外へ40cmほど張り出している。

柱穴等の施設は検出することができなかった。

なお、遺物はカマド袖付近から多く出土している。



第2図 第1号住居址実測図

第2号住居址（第3図）

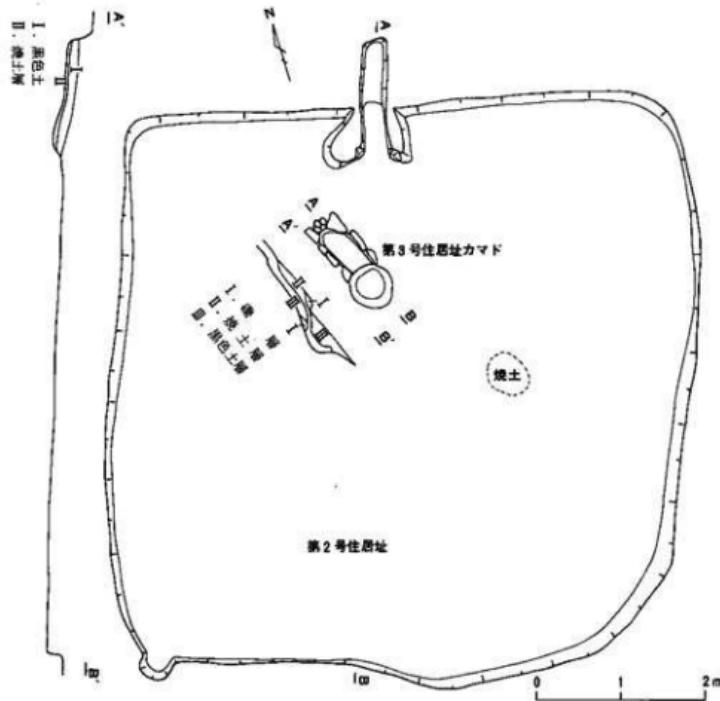
第1号住居址の東方10mの位置にある。北壁にカマドをもつ、東西680cm、南北680cmのほぼ正方形の隅丸の住居址である。主軸方向N-14°-E。

遺構検出面における壁の高さは、東南隅が最も高く約20cm、低い西南部では約8cmであった。

住居址の施設は、北壁中央にカマドをもつほか、住居中央部床面に炉と考えられる焼土層が確認されたが、柱穴等を検出することはできなかった。

カマドは袖幅110cm、炊口30cmの大きさで、住居内へ60cmほどつくり出している。また、煙道も住居外へ80cmほど伸びている。このカマドは、袖口に石を立てて使い、そこへ粘土をつみあげてつくっている。火床は床面を約10cmほど掘りくぼめている。

住居址内中央東より、55cm×45cmの階円形の焼土部分があり、かなり厚く焼土が残っていることから地床炉かと考えられた。



第3図 第2号・第3号住居址実測図

第3号住居址（第3図）

第2号住居址によって破壊されており、カマドの石組が検出されただけである。カマドは住居址北壁に置かれたもので、その大きさは幅50cm、長さ80cmを計る。このカマドは、第2号住居址と同レベルで検出され、その炊口部分は約30cmほど下層に存在していた。

のことから、第3号住居址はカマドの下半を残すだけで第2号住居址によって破壊されたものと判断された。

出土遺物

山崎遺跡から出土した遺物は、土師器・須恵器・石製品などである。以下遺構ごとにわけて記述する。

第1号住居址出土遺物（第4図）

第1号住居址出土の遺物は少なく、わずか6点にすぎない。①は底部計15.5cmを計る大型の甕の底部である。外部は幅3cmほどの工具によるタタキ目整形を行っている。焼成は還元焼成のため赤褐色を呈する。②は長胴甕の胴部上半部である。口縁部径23.8cmを計る。胴部外面はヘラ削り、内面はナテ整形。③は壺の底部である。底部径9cmを計る大型の器形をもち、底部は回転ヘラ切りの後ついでねいなヘラ削りを行っている。色調は茶褐色。④・⑤は須恵器である。④は底部径10.4cm、口縁部径14.7cm、器高4.6cmを計り、0.6cmの高台がつく。器面内外面ともにクロ痕を残す。⑤は底部計6.5cmを計る壺底部である。ロクロ整形の後、回転糸切りにより底部を切り放している。⑥は砥石である。表面に使用痕を残す。

第2号住居址出土遺物（第5図・第6図①・②・③）

第2号住居址からは多くの遺物の出土がみられ、土師器壺・長胴甕・須恵器壺・甕などである。

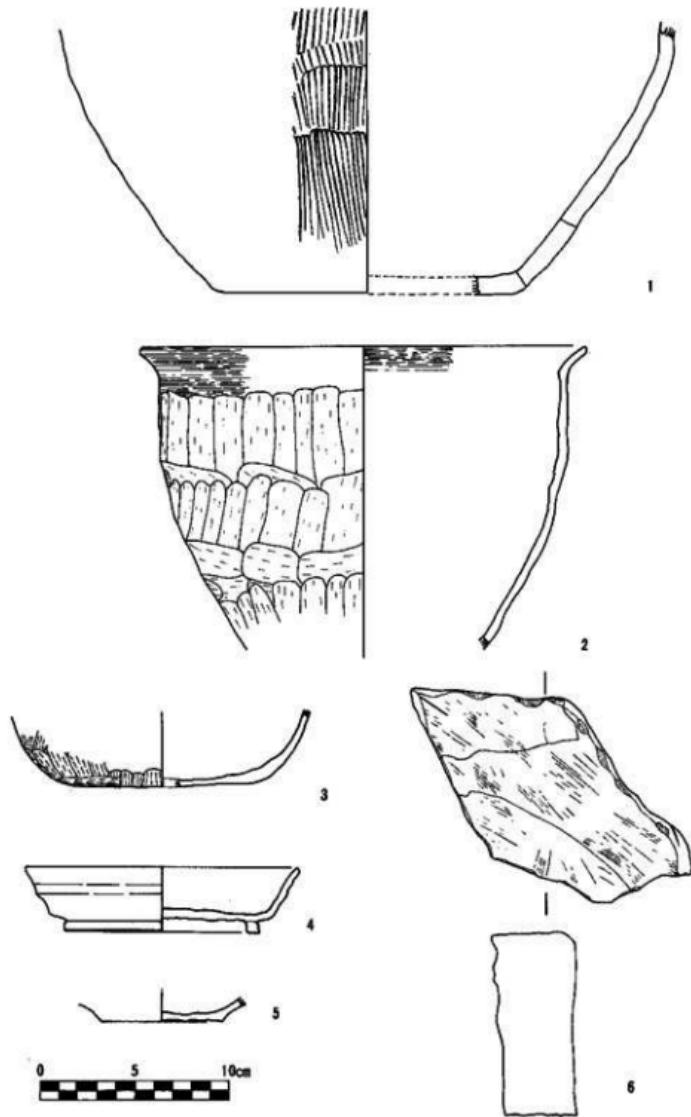
高台付壺形土器は5点出土している。①は口縁部径15cm、高さ6cmで高台底部8cmを計る。②は口縁部から底部にかけての3分の2ほどの破片であるが、推定口縁径15cm・高台底部径6.8cmで器高は5.4cmを計る。③・④・⑤は底部である。この5点はいずれも、壺胴部下半で立ちあがり、そのまま外返する器形をもつものと思われ、高台底部径も②を除くとおおむね8cmと規格性がうかがえる。色調はいずれも灰褐色を呈する。

⑥・⑦・⑧は土師器壺である。⑨は口縁径17cm、⑩は口縁径11.5cmと大型の壺である。⑪は口縁部径15.5cm、底部径4.5cm、器高4cmを計る小型の土器である。いずれも、ロクロ成形で底部回転糸切りを行っている。3点とも炭素付着による内黒土器である。

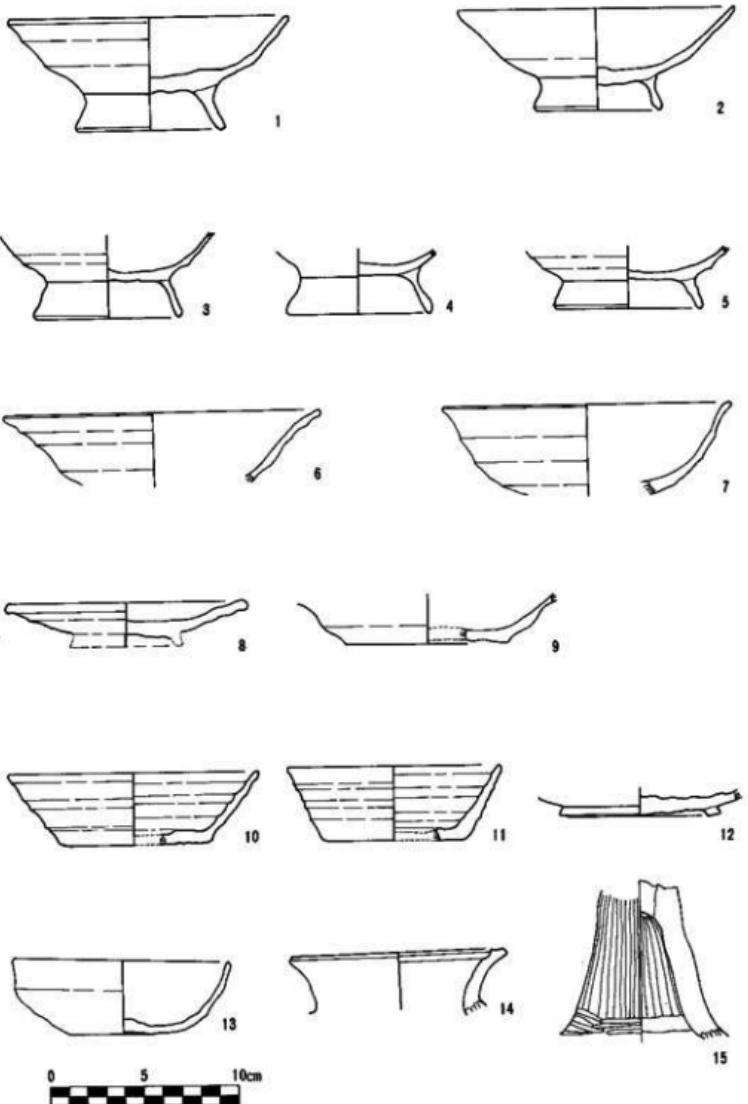
⑫は高台付皿形土器である。口縁部径13cmを計る厚手の土器である。高台部を欠損する。内外面とも炭素付着による黒色を呈する。

6図⑬は床面にちらばっていた土器である。口縁部径24.2cm、底部径7cm、器高36cmの長胴甕である。胴部最大径を口縁部にもつ砲弾形の器形をもつ。口縁部をヨコナテ整形し、胴部外面はヘラけずりを行っている。

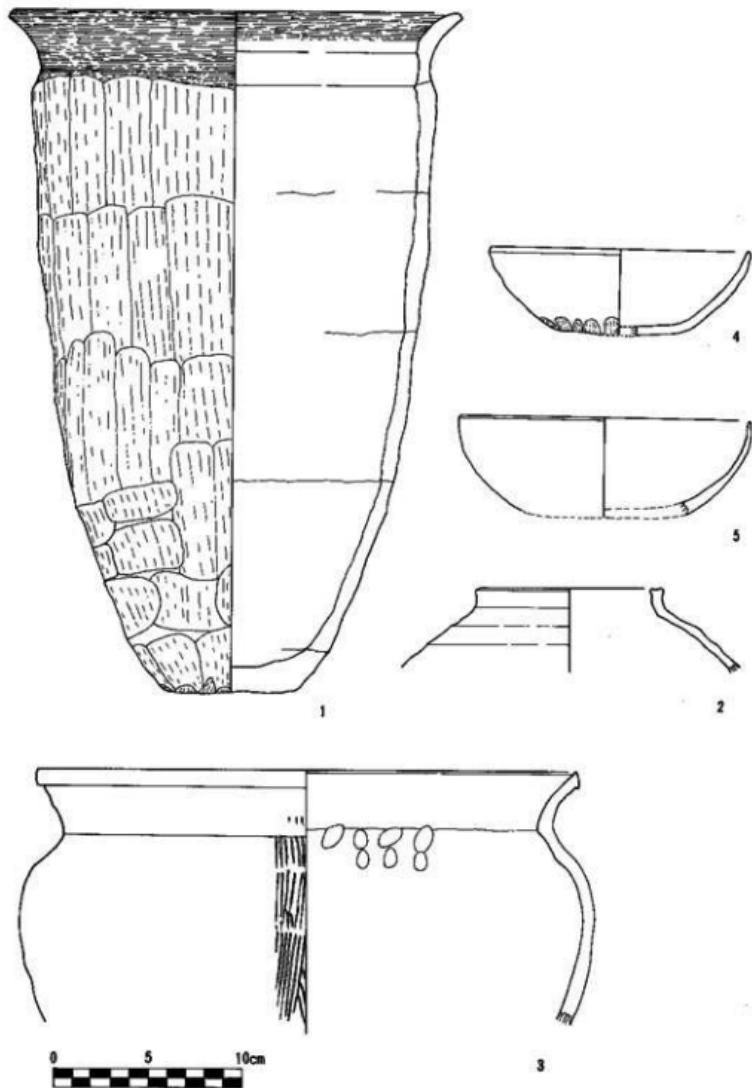
須恵器は6点出土している。⑭・⑮・⑯は壺である。住居址覆土より出土しており、いずれも



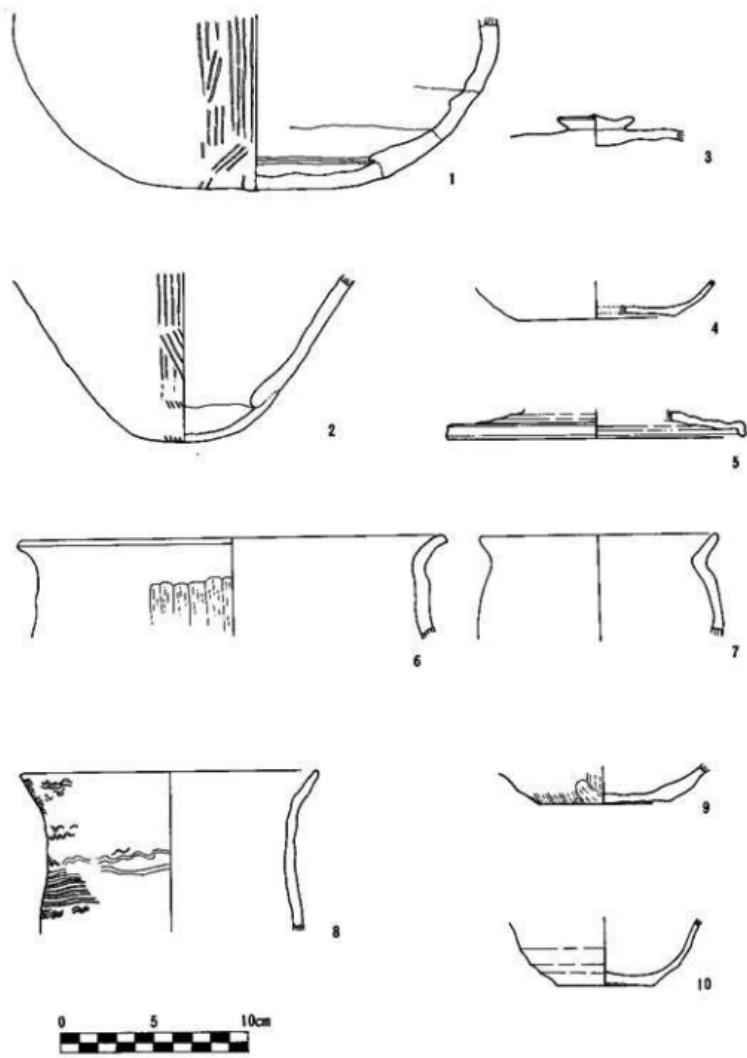
第4圖 第1號住居址出土遺物實測圖



第5図 第2号住居址出土遺物実測図



第6図 第2号・3号住居址出土遺物実測図



第7図 遺構外出土遺物実測図

1%ほどの破片である。⑪・⑫はロクロ成形の底部はヘラ切り手法をもちいている土器である。⑬には高台がつく。6図⑭は壺の口縁部である。⑮は側部外面にタタキ目をもつ變形土器である。

第3号住居址出土遺物（第6図4・5）

第3号住居址出土と明らかに判断できる土器が2点出土している。いずれも土師器壺である。⑯は口縁部径14cm、器高4.5cmを計るが底部の1部を欠損している。⑰は推定口縁部径15.5cmの1%ほどの土器である。2点とも丸底で器厚が厚い。成形は巻き上げ手法で形をつくり、内外面ともナデ整形で形を整えている。底部はヘラ削りで調整している。色調は2点とも赤茶褐色を呈する。

遺構外出土遺物（第7図）

遺構外からは多量の土師器・須恵器が出土している。①は壺形土器の底部、②は横置の部分。③・⑤は須恵器環蓋の破片。④・⑨は土師器壺の底部。⑩は須恵器壺の底部。⑥・⑦は變形土器の口縁部である。なお、⑧は弥生土器の變形土器の側上判部である。

山崎遺跡からは、弥生時代から平安時代までの遺物が出土しているが、弥生時代、古墳時代と考えられるものは極めて少ない。その主体となるものは、平安時代の遺物である。

第1号住居址からは出土遺物も少なく、その時代判定はむづかしいが、器壁の立ち上った須恵器高台付壺が出土していることから、おおむねこの時代、すなわち、8世紀のものと考えてもよさそうである。2号住居址からきわめて高い高台をもつ壺型土器が多数出土している。上小地方における類似の資料は多くはない、これはまとまった資料といえる。この住居址に明らかに伴なうと考えられるものは、高台付壺と皿、それに長胴甕である。この住居址の時期は、これら出土遺物からみて、11~12世紀のものといえる。

3号住居址は2号住居址によって破壊されているためその全容は知り得ないが、わずかにカマドの1部とそれに伴うと考えられる土器2点が出土している。この土器はロクロが導入される以前の土師器壺で、7世紀のものと考えられる。

第3節 山崎城跡

山崎地籍のある台地は浦野川と室賀川により南北が削られ、東方へ三角形状に突出し、西方へ漸次広くなっている。台地上に登った所に東京電力の送電用鉄塔があり、台地の幅は南北約30mとなる。鉄塔のすぐ西側に堀形が南北方向にあり、台地東端よりこの堀形までを『南波堀敷』と呼んでいる。この堀形から約70m西進したところに切削状の凹地があり、雑草の剪取りをしたところ堀形となり、西堀であることが確認された。この両堀形の間は平地で水田となっているが、古くから『尾曾野堀敷』と呼ばれていた。ここに試掘グリッドを入れたところまたま後述のような内耳土器が出土したことから、検討の結果、東堀と西堀を備えた中世に属する遺跡ではないかと推考されたので、その地名をとって「山崎城跡」と名づけ、発掘調査を開始した。

東堀

以前は南北に通じていたが、現代では南端部に幅1.5mの農道があり、堀形は埋められている。農道を南端として北方へ約42m進みそこより以北は東北方へ偏向し約18mで室賀川旧河川敷へ臨む断崖となって終っている。堀内は南端より北へ42mの間は埋められて南側36mの間は水田となり、北側約6mの間は畑となっている。こより北端までは原形のまゝ残存している。東堀の東壁は「南波屋敷」の畠地面で、西壁は屋館址面となっているが、西壁の方が約80cm高い。

しかし北端部の荒地部分では東西両壁はほぼ同じ高さとなっている。これは居館址敷地を作成のため堀を掘った土を盛り上げたことによっているものと考えられる。東堀の掘り方はその断面からみると箱形薬研堀りで、水田面からの深さ最深部約170cmである。水田面から西壁上端までの高さが約130cmであるにつき、堀の深さ約3mとなる。なお北端部の荒地状の地域でもは、同様の深さとなっている。東堀の幅は平均5.5mであるが、南端部はややせまくなっている。

西堀

東堀がその原形をよくとどめているのに対し西堀は雜草を刈取るまでは堀跡かどうか疑問視されていた。南端は断崖端から約11mまでは埋められ水田となっており堀形の確認ができない。ここに東西に通する道路がある。

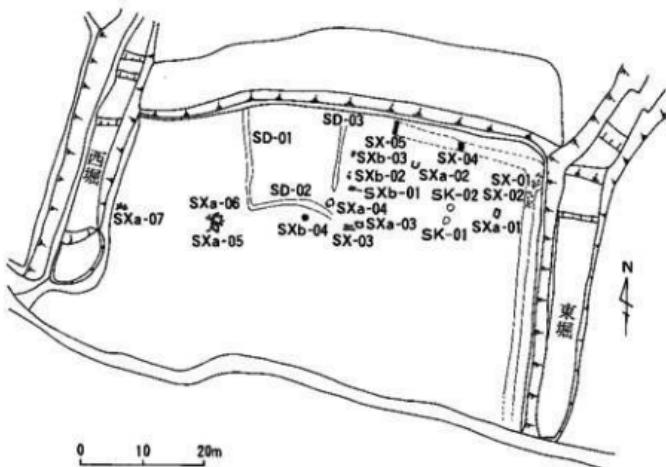
堀形は道路の北縁から北方に向って漸次深さが増し、堀底が下り傾斜しながら断崖北側にある旧河川敷へ達し南北の長さ約45mである。堀の南端部では堀内に扇尖をおき居館址内に扇形状に展開する一枚の水田があり、この部分の堀巾は約2.5mと狭くなっている。この扇状部は西方から居館址への入口施設の設置場所の跡地かと推察できる。堀幅は扇状部分の北縁から居館址の北縁付近まで約9m、そこから北へは漏斗状にせばまり室賀川の旧河川敷へ急傾斜となって接し堀跡は終っている。堀の底部は平地が少なく畠地に利用されている。

西壁下部には南から北へ流れる水路があり、滝地となっているため、堀底は東から西への斜面となっている。東西壁の高さの差は南縁で約40cm、北縁では約90cm西壁が高くなっている。東堀では西堀が高かったのとは対照的である。埋没される前の原形の堀形は東堀とは、同形で箱形薬研堀となり、内部は大きく三つの土層が堆積している。居館址所在面である東壁からの深さは、現在の堀底まで約110cmの深さであり以下堆積土層となっている。表土層は約15cm、第二層は茶褐色の粘質土層で約115cm、第三層は灰色の砂質粘土層で約40cmの深さであり、居館址面からの深さは約280mであったと考えられ、東堀よりやや浅い。なお堀内には北方に通する堀底道が設けられていたと考えられるが詳細は後考を待ちたい。

居館址内の調査

東南隅に基点をおき、南北にA～Q、東西に1～27、3m×3m=9m²のグリッドを316設定し、調査を行った。調査地域は北半部とし南半部を排土の置き場とした。排土置場約62Gとなつたため調査範囲は254Gの2286m²となった。

居館址内の第一層は耕土層で12～15cm、第二層は赤褐色の溶脱層で2～3cm、第三層は黒褐色



第8図 山崎城跡実測図

を呈する強粘土層、下層に進むとともに褐色化し12cm~15cmの深さで地山である褐色強粘土層となっている。ブルトーザーで除去した土層の深さは地表より約25cm~28cmであり、褐色強粘土質の地山層直上まで除去した状況となった。この層を遺構検出面とし精査し知り得た遺構について述べたい。

東縁及び北縁に沿う帯状石列遺構 (SX01・02・04・05)

東北隅M5G、N5Gに亘って石列があり、その東西両側に黒色土層が巾約1mにあった。石列及び黒色土層の発掘を進めたところ、石列は不揃いで一部にあったのみであったが、黒色土層は約10cmの凹地状となり、それが南方へ約18m帯状に東縁に沿って排土堆積處までのびている。また北方は北縁まで約5mあり、計23mである。結局東堀の西壁上端から約85cm居館址に入って南北に凹地があり、右列はそこに位置している。なお○5G地点では東よりに山張った石列があった。また帯状凹地内のE6G、F6G・H6Gには径約30cmほどの円形あるいは方形の炭・灰の層があった。この帯状凹地は北縁から西方へ延伸していることから、北縁にそって7mの距離をおいて南北のトレーナーを巾2mで二ヶ所発掘した。両トレーナーとも帯状凹地の中約1mのうち両側に約15cmほど残し、中央部に巾約70cmに亘って礫が敷きつめてあり、Q9G内をSX04・R12G内をSX05とした。以上のことから東縁と北縁に沿って帯状に門地のあることを知り得た。また、この中央に石列をもつ帯状凹地は居館址周縁に設置した土塁の根石ではないかと考えられるが、詳細については後考を待ちたい。

石列造構第3号（SX.03）

配石造構第3号（SX.03）の西側M15G内にある。約20cmの間をおいて南北二つの石列が東西方向にあり、雨落溝址の一部かと考えられる。南北両列の石はともに東西方向に長く並んでいる。北列にある石は二個であり東側石は長さ45cm、巾約25cm、西側の石は長さ50cm巾30cmで両石の間は約5cmである。なおこの石の上面には長径約35cmの隋円鉢形の凹みがある。南列は東西約130cmの間に4個の石があり、西部に3個並び、約5cm離れた東方に長さ約40cm巾約15cm大の石が一個ある。南北両列石の間は東西方向の溝状になっており、石列の上端からの深さは約15cm内外である。

土塙状造構第1号（SK.01）

M9G杭の南側に長辺110cm、短辺8cmのや、隅丸方形の黒色土部分があり、西南隅に方約30cm、厚さ6cmの石が、さらにその西側に焼土があった。調査の結果この黒色部分は深さ約30cmの方形土塙であることがわかった。内部の地層は3層にわかれ、第一層は黒褐色土層、第二層は黒色土層であり炭・灰が多量に混入していた。そして第一層上の平石下部には粘土によるかまど状の構築物があった。そしてこれら構築物の最下部すなわち土塙底面上に石臼の完全なものが一個置かれていた。径約19cm厚さ6cmの安山岩製のもので刻日の磨消から使用済のものを埋めたと思われる。石臼設置の意図は知り得ないが、かまど状造構であったと推考される。

土塙状造構第2号（SK.02）

前記第1号土塙の北約30cmのところに二つの円形小土塙があり、南部の土塙は径約55cmで深さは4~5cmと浅く、北部のは径約65cm、深さ約12~13cmである。南部の土塙の上層には一個体分の壺形の土師器片及び高环の脚部があった。これらの土器をとりあげ掘り下げるところ径約55cm、地表よりの深さ約4.5cmの土塙となった。北部の土塙の中央には土師器の壺形土器の中腹部から底部までが埋められた状態であり埋蔵土塙であると推考された。

配石造構第1号（SX.01）

N7G内の南よりにあり、中軸をや、東北に偏したほぼ方形形状の石組である。南北の内法約125cm、東西の内法約65cmである。東及び西列の石組のうち北側一個の石が欠失しているが、精巧な石組である。一部に加痕のある石を使っているほか、自然石であり最大なのは60cm×30cm程である。各辺とも下部に石垣がつき約35cmで底面となっている。穴の内部の覆土は上下二層からなり、上層は褐色粘土で周囲の土層と同じである。第2層は黒色土層で炭や灰が多量に混入をしている。特記すべきは内部の西南隅に壺形の石と同大の石を使ってかまど状の構築があったことである。底面からの高さ約25cmであり石組の中位に焚口状の開口がある。この石組の上部に煮沸用具を据えれば、かまどとなる状態のものである。周壁の石垣には裏詰めもあり精巧な構築である。

配石造構第2号（SX.02）

P11G内にあるU字状の石組造構である。試掘の際に内耳土器を出土し本遺跡発見の端緒とな

った。西辺は約80cmの間に3個の石、南辺は約65cmの間に2個、東辺は70cmの間に3個の石をそれぞれ並べている。北辺には石列がないが、もとあったのが除去されたものと考えられる。石組内の深さは25cm内外である。なおこれらの石は居館址内の地表面より3~4cmの高さにある。土塙内には炭及び灰があることから「かまと」状の遺構と考えられる。

配石遺構第3号 (SX.03)

M14G内に所在する東西約130cm、南北約80cmのほぼ方形の範囲に30cm×20cm大を中心とする集石状遺構である。西縁には南北方向に5個の石が並び石組状の如くである。この様相は他の三方にもみられた。石組による内部に落下したと考えられる石をとりあげたところ、東西の内法約55cm、南北約30cmの方形状のおちこみが約10cmの深さにあることを知ることができた。なお東側石組のなかに3個の窓石が使われていた。縄文式中期の土器に伴する窓石と同様のもので注目される石器である。その他の石器及び縄文式土器の出土がなく縄文時代の遺構ではない。しかし何の遺構かは後考を待ちたい。

配石遺構第4号 (SX.04)

後述する溝状遺構第2・3号間、N16G内にあり、5×15cm大の石を横列に卵形状に並べた石組遺構である。その内部は内法で長径約1m、短径約50cmの土塙となっている。南半部の底部に4個の焼石が据えられており、それらの石の間から焼骨の小片が出土した。土塙の形は鉢状であり、中央部がもっとも深く約25cmである。焼骨が小片であり確たることは不詳であるが、もし人骨であれば土塙墓と考えられるが、後考を待ちたい。

配石遺構第5号及び第6号 (SX.05・06)

M22G、N22Gの2グリッドに亘って二つの集石遺構が接続した形である。N22G内にある集石は径170cmのほぼ円形状の範囲に、30cm×40cmほどの大きさのものを主として集められている (SX.06)。それに対し南にある遺構 (SX.05) は集石というより配石遺構と云う如きものである。北側には東西に並ぶ数個の石からなる一ブロックがあり、その南約50cm離れて、やはり東西方向に数個の石が並ぶブロックがあり、両者を合せて一遺構と考えた。第6号遺構を周縁にある石組から検するに中軸を西北から東南方向にやや偏した方形になり、内部に崩落状にあった石を除去した結果西側の石組は崩落しているが他の三方は良好な形で残っていることを知り得た。石組内は土塙状となり、隅丸方形で南北約52cm、東西約70cmの規模で深さ約20cmで、底面はほぼ平面となっている。第5号遺構はその内部を掘りあげて調査をしたところ、周縁の一部に石積みがあつたが、他の石組遺構に比しては不整のものである。溝遺構ともその性格は不明であった。後考を待ちたい。

配石遺構第7号 (SX.07)

居館址の最西部で西堀東壁上で、N27Gにある。この遺構は遺構検出面からは全く知り得なかつたが、居館址の東縁でみた築地塙の基盤状遺構の存否を確認のため、西縁にそってボーリングした結果知り得た遺構である。西縁から居館址内へ約180cmの地点まで石列があり、使用石は河原

石の転石である。30cm×20cm内外の石を10余個横位置一列に並べてあるが、東端に於ては四個の石で方形のブロックをつくりその内部に1個の石をおいている。四周のうち東位置の石はもっとも大きく立石状で、その高さは内部にある石から約12cmである。この石に接する南北両側の石も約10cmの高さを示している。内部の石は13cm×16cm大の平板状の石で赤色を呈し、焼けているが、四周の立右には被焼のあとがなく、炉址と即断するができない、その性格については不明である。

本遺構の知見から西縁に沿って石列の存否をポーリング調査したが、関連遺構を知ることができなかった。

集石遺構第1・2・3号 (SXu01・02・03)

居館址内のは、中央の北半部、即ちO14GからQ14Gにかけ、拳大の石を中位とする大小の石による集石遺構が3基あり、うち南の一基(SXu01)は東西方向に並び、北側二基(SXu02・SXu03)は南北方向に並んでいる。第1号(SXu01)は底部を西におき南北の最大巾約90cmで東方へラッキョウ状を呈し東西の長さ約210cmである。そのうち東半部約1mの間にはとびとびに石があり、その間に土師器の破片が散在している。西半部には石がやや集積状にあるとともに、土師器片があり、高壇の脚部、梯形土器の体部の大形の破片など注目される遺物が数多く出土した。

第2号(SXu02)は第1号の北約150cmの位置にあり、南北約130cm、東西約20cmのは、方形の範囲内に一つ並び状に10余個の石があり石列に混じて土師器の破片が数点出土した。

第3号(SXu03)は、第2号の北約220cmにあり東西の巾約50cm、南北の長さ約1mのは、長方形の範囲内に大小30余個の石が並んでいた。これらの石は一層に並べられている。

以上3遺構の知見を略述したが総じて積石状でなく、単層に並列状であることが注目される。しかも1号には形態及び部位のわかる大形の土師器片があり、2号にも土師器片が出土していることは、居館址にともなう遺構ではなく、それ以前の平安時代に比定されるものと考えられる。詳細については後考を待ちたい。

集石遺構第4号 (SXu04)

配石遺構第4号(SXu04)と後述する溝状遺構を間にして南側、N17G内にある。径約1mのは、円形状に多数の石が集積状にあったことから集石遺構とした。しかし、内法約40cmの方形状の石組とその内部に落入する石積みがあると考えられ、それらの石を除去した結果約50cm×40cmのは、長方形の土塹であり、四周に石組をしたもの一部の石が内部に落入したものであることを知り得た。土塹の深さは約20cmである。なお四周の石組のうち北縁と南縁の中には石臼のかけたものが使用されており注目された。この石臼は同一個体である。

溝状遺構

遺構検出時に居館址内のは、中央北半部にU字形の帶状の黒色土があり溝状遺構とし、西側南北方向の部分を第1号(SD01)、南側東西方を第2号(SD02)、東側南北方向を第3号(SD03)とした。

溝状遺構発掘当初に於ては方形周溝墓と予想したが第1号と第2号はは、同じ規模で接続しき

らに第2号東端から円弧状に南方へ延伸していることを知り得た。しかし第3号南端と第2号は約3m離れ、その間に配石遺構第4号(SX.04)があり、さらに巾も第1号が平均1mに対し第3号は約50cmとせまく、深さに於いては60cm内外に対し10cm内外でごく浅溝である。これらのことから第1号・第2号は同一遺構であるが第3号は全く別個のものであることを知り得た。

溝状遺構第1号・第2号 (SD01・SD02)

S20Gの北端、居館址の北縁からはじまりN21Gまで約15m南進し、(ここまでをSD01とし、これより先をSD02とする。)ここで東へは直角状に折れ、や、北に湾曲しながらN16Gまで約11m延伸し、ここで再び東南方へ曲折しM16Gまで続く。遺構は南に延伸すると思われたが、日程の都合で調査することが不可能となつたためトレンチを3ヶ所発掘した結果、西南方へゆるく弧状に約10m続いていることを知り得た。しかしこの先は堆土の堆積場であり、全く知ることができなかつた。

溝の巾は最大部で約120cm、せまい所で約80cmで、不等ではあるが、平均1m内外である。溝の掘方は箱底式の薙研堀であり底部の巾は15cm~25cmで、深さは55cm~65cmが平均的である。溝内の覆土はSD01の一部に一層の埋没があったが、3層及至5層である。

SD01のうち、ABトレンチとCDトレンチの間約260cmに亘って上部より約25cmから底部までの覆土は他の部分より硬めで、その層上に土師器の小形圓形土器が横倒しには完全な形で出土し、さらに南側部には小破片が多量に散在していた。またSD01の北端ではその深さ約65cmほどの底部から土師器大形態が削れてはいたが、1個体分出土した。(この土器は発見直後盗難にあい詳細不明である。)これら土師器のあり方は溝状遺構の性格検討に大きな問題を与えており、その結論は後考を待つものであるが、居館址に設けられた諸施設の間を南北に通じて設定されたものと考える。

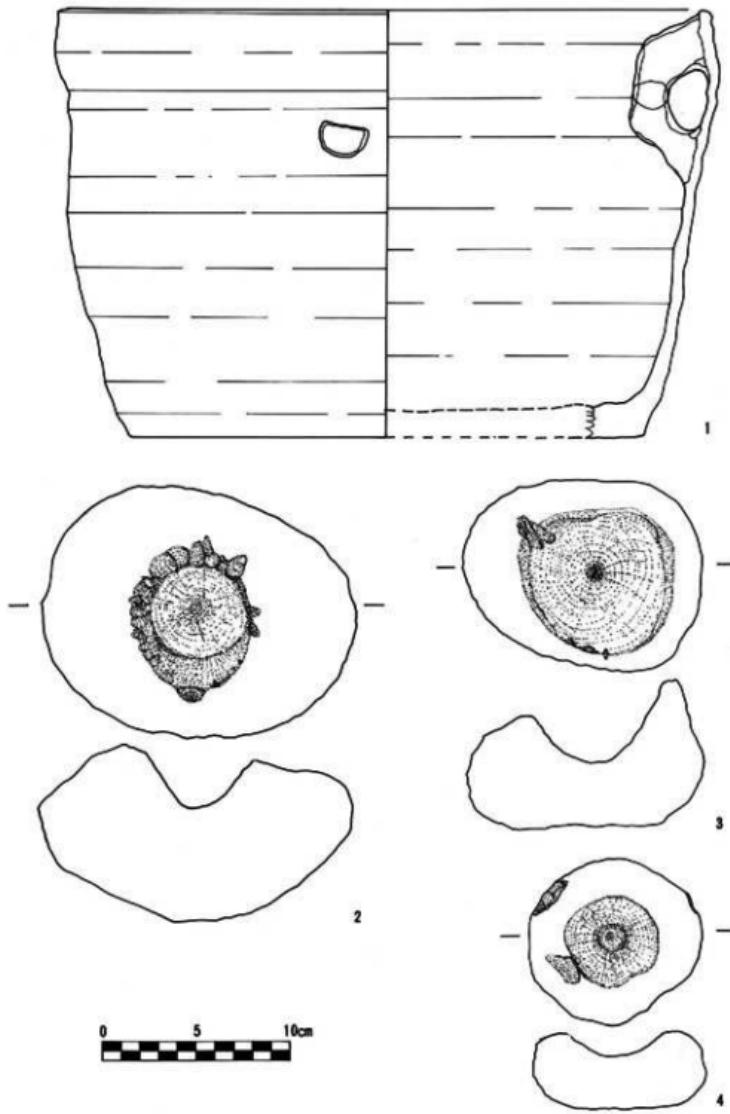
溝状遺構第3号 (SD03)

居館址の北縁から約3m内に入つてR14Gの北部からO14Gまで10.5mの長さにある。第1号・第2号とは別個の遺構であり、内部も皿状に浅く、且又内部には石が一点あった以外は全く知ることができない。遺構としての性格は知ることができない。

出土遺物 (第9図)

山崎城跡から出土した遺物には、城跡に伴なうと考えられる中世のものと、城跡下層の溝状遺構から出土した古墳時代のものがある。

山崎城跡に伴なうものとしては、若干の青磁それに内耳土器、石皿、凹石、砥石などがあり、城跡下層からは古墳時代前期の土師器が出土している。



第9図 山崎城跡出土遺物実測図

第4章 まとめ

山崎遺跡からは3軒の住居址が検出された。第1号住居址は8世紀に、第2号住居址は11~12世紀に、第3号住居址は7世紀に比定される。このことから、山崎遺跡は7世紀から11世紀にかけての集落跡であることが判明した。

この調査で注目されるのは、第2号住居址と第3号住居址である。2号住居址は11~12世紀のものとしたが、上田・小県地方でのこの時期の住居址の検出は多くはなく、出土資料も良好なもので、平安時代の良好な資料といえる。また、3号住居址も、7世紀のものでこの時期のものとしては始めての出土である。カマドと床面1部の検出ではあったが、カマドの構造が石組であることは注目される。

山崎城跡は、浦野川と室賀川によって形成された、天然の断崖を利用した城跡である。台地を横断する東西の堀で区画し、東縁及び北縁に土塁をめぐらす。北側には二段の帯郭をもつ。城跡内部からは建物跡は知ることができなかったが、土塙・石積み造構等を検出することができた。この城跡は、中世の城跡あるいは居館址と考えられるが、調査が一部に限られたため、その全容を知ることができなかつた。しかし、中世におけるこの地方の豪族の城跡と考えることができる。山崎城跡の調査は、今後の中世史の研究において貴重な資料を提供してくれたといえる。



山崎城跡遠景



西堀



東堀



遺構全景



SXa-03・SX-03・SD-02



SXb-04



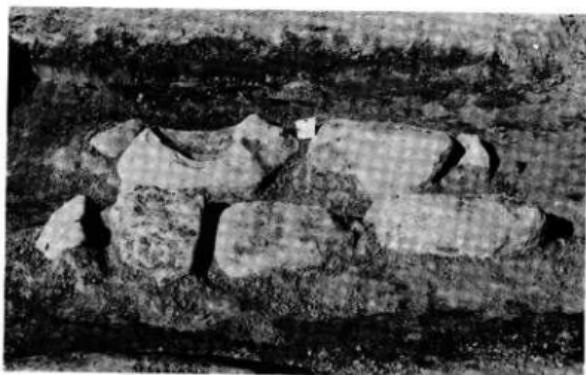
SXa-01



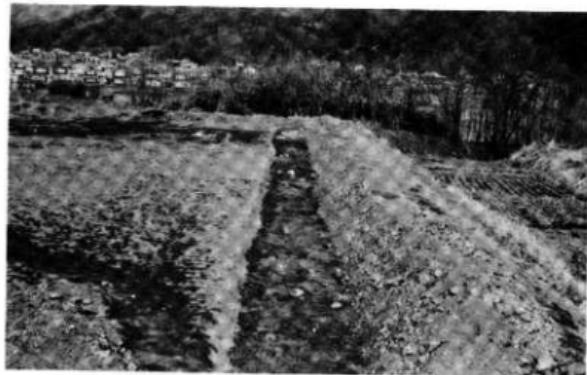
SXa-04



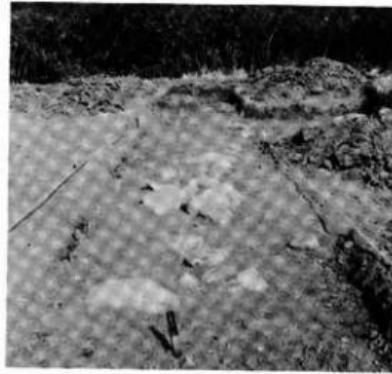
SXa-05・06



SX-03



束縛とSX-01・02



SX-01・02

山崎

—長野県上田市山崎遺跡・山崎城跡緊急発掘調査報告書—

発行 1979年3月

上田市教育委員会

上田市・川西地区土地改良区

編集 上前沖原遺跡発掘調査団

印刷 鬼灯書籍株式会社
